

英語のアクセントについて

著者	埋橋 勇三
雑誌名	白山英米文学
号	36
ページ	1-20
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004496/

英語のアクセントについて

埋 橋 勇 三

1 はじめに

英語の語にはアクセントがある。Woman は **woman** であり、woman ではない。ゴチック体はアクセントのある音節を表わす。すべての語にこのように強く発音する部分がある。これは英語という言語のもっとも大きな特徴の1つである。本稿においてはアクセントがどのような役割を担っているかについて述べてみたい。たとえば、音節区分を行なうときにアクセントを無視することはできないし、名詞と動詞、ゲルマン系の語とロマンス系の語について述べるときにもアクセントは重要である。アクセントは第1アクセント、第2アクセントのようにランクがあるし、第2アクセントが第1アクセントに格上げされることもある。本来、アクセントがまったくない音節にアクセントが発生することもある。アルファベットの x の発音を決めるときにもアクセントは重要な要素になる。また、複合語には複合語特有のアクセントがある。このように考えると、アクセントは単に強く発音する部分という単純な意味だけでなく、アクセントと密接に関係するいろいろな現象がある。これらの現象のいくつかを取り上げて、アクセントの重要性について述べてみたい。

2 名詞、形容詞、動詞のアクセント

名詞、形容詞のアクセントは語頭の音節に、動詞は語末の音節に来るという一般原則があるが、これには何らかの理由があると思われる。次の英語は the を除けば、2音節語からなり、名詞、形容詞、動詞が含まれている。

The stubborn woman refused.

アクセントのある音節をゴチック体で表記して、韻律分析をすると次のようになる。

The stub | born wom | an refused.|

弱強 | 弱強 | 弱弱強 |

形容詞と名詞は連続することが多いので、アクセントを前寄りに置くことによって、「強強」になるのを防ぐことができる。もし、stubborn であれば、stubborn woman と「強」が連続する。「強強」のリズムは言語のあり方としては望ましくない。「強」が2つ、3つと連続すると、独裁者のアジ演説の雰囲気になる。強い緊張を持続しなければならないので、話し手にとっても聞き手にとってもかなりの負担になる。われわれが言語を使うときには心地よいリズムが必要である。そうすると、「強」と「弱」が適度に混じっているのがよい。できれば、一定のリズムになるのが望ましい。すべての場合に上手く行くわけではないけれど、名詞と形容詞のアクセントを語頭の音節に置くと、自動的に「強強」を避けることができる。もっと正確に言うならば、「強強」を避けることができる場合が多くなる。動詞のアクセントが後寄りになるのは主語になる名詞が1音節語であって強く読むとしても、動詞のアクセントを後に置けば「強強」のリズムを避けることができる。それと動詞は述部を成すので主題となる名詞と文法的機能を区別するためにも後寄りにアクセントがあるのがよい。Junction と nexus を区別するのに名詞、形容詞の前寄りのアクセントと動詞の後寄りのアクセントが間接的に貢献しているようにも思える。動詞は目的語を従えることが多いので、後寄りにアクセントがある方が目的語への渡りがつやすくなる。目的語は名詞であり、多くの場合に冠詞を伴う。冠詞は「弱」になるので、動詞のアクセントが語末にあっても「強強」を避けることができる。名詞、形容詞のアクセントが前寄り、動詞のアクセントが後寄りになることによって、英語という言語の大きなリズムにおさまりやすくなると推測される。詩と異なり、散文ではすべてが規則的なリズムを刻むわけではないが、だからと言ってまったくでたらめなリズムかというとそうではない。ここにあげた理由によって名詞、形容詞、動詞のアクセントの位置をすべて説明できるとは考えていないが、無視できない一面があるのではないか。根底にあるのは、言語はリズムであるという考え方である。

3 意味とアクセント

abstract には形容詞、名詞、動詞の3つの品詞がある。これらの品詞を音声的に区別するときにアクセントが重要な役割を果たす。形容詞と名詞は **abstract** で、動詞は **abstract** である。異なるのはアクセントの位置のみである。一般

論として言えることは、名詞、形容詞は語頭に、動詞は語末にアクセントが来る。Abstract の場合にもこのことが当てはまる。Contract も同じように名詞は **contract** で、動詞は **contract** である。しかし、動詞であっても **contract** のように名詞と同じアクセントになることがある。Contract の名詞としての意味は「契約」であり、動詞として使う場合にも名詞の「契約」の意味を残したいという意図が働くと、動詞であっても名詞と同じアクセントの位置となることがある。「契約する」以外の意味、たとえば、「病気になる、短縮する」などでは「契約」の意味から外れるので、語末の音節にアクセントが来る。アクセントの位置は品詞によって決まるが、それだけでなく意味によっても左右される。Correct は形容詞と動詞があるが、発音は **correct** の 1 種類のみである。意味を見ると、形容詞、動詞の違いはあっても「正しい、正す」が核になっている。この語の語源的意味は <make straight> であり、本来、動詞性を強く持つ語である。このことが影響して形容詞になってもアクセントの移動はなく、動詞のアクセントを受け継いでいる。Contract は動詞として使うときでも、「契約する」の意味のときは名詞のアクセントを踏襲することを述べたが、correct の場合はその逆の現象が見られる。Essay は名詞の場合には前にアクセントがあり、動詞は後にアクセントがある。動詞の意味は「試みる」であるが、動詞的な意味を持つ「試み」の意味で使うときには、アクセントを動詞のアクセントのままにすることがある。Request も名詞、動詞の用法があるが、発音は **request** のみで、アクセントが前に移動することはない。これは request が動詞性をより多く含んでいることを示している。

4 詩とアクセント

次の詩は Frances Cornford の 'On Rupert Brooke' という詩を韻律分析したものである。ゴチック体はストレスのある音節を示す。

A young | A **pol** | lo, **gold** | en-haired, |
 Stands **dream** | ing **on** | the **verge** | of **strife**, |
 Mag **nif** | i **cent** | ly **un** | pre **pared** |
 For **the** | long **lit** | tle **ness** | of **life**. |

この詩は弱強 4 歩格 (iambic tetrameter) で書かれている。詩には詩のリズム (韻律) があり、語が固有に持っているアクセントと異なる部分がある。1 行目は語が固有に持っているアクセントと詩のリズムが完全に一致している

と見てよい。2 行目では stands にストレスがない。3 行目の magnificently は magnificently で通常は一箇所にアクセントがあるが、詩行では 2 箇所にアクセントがある。Unprepared は un- に第 2 アクセントがあり、-pared に第 1 アクセントがある。4 行目の littleness の -ness にアクセントが落ちることは、通常、ない。語が固有に持っているアクセントにストレスが落ちることが多いのであり、これが頻繁に破られるといかに詩といえども、言葉としての体をなさない。しかし、詩においてはすべての語が詩のリズムのなかに組み込まれるのであるから、アクセントのある音節からアクセントを取り除いたり、あるいはアクセントのない音節にアクセントを置いたりすることが頻繁ではないにせよ起こり得る。Magnificently と 2 つの音節にアクセントを置くことにより、magnificently という語が抑揚を持ち、波打つ感じになる。この語に込められた詩人の強い思いが伝わってくる。第 1 アクセントは -nif- にあるから、この音節の聞えがもっともよい。-cent- のところは恐らく第 3 アクセントくらいになるので -nif- ほどの聞え (sonority) はないけれど、その前の -i- よりは聞えがよい。第 1 アクセントと第 2, 第 3 アクセントが入れ代わることは、通常、ない。4 行目の the は、通常、アクセントを置かない。また、littleness の -ness もアクセントを置かない。本来、アクセントのない音節に置くことにより詩のリズムを刻むのである。Littleness の第 1 アクセントは lit- があるので、この部分の聞えがよい。-ness は同じ詩脚内の -tle- に比べれば強いということであって、lit- より強くない。詩のストレスでもっとも重要なことは上のゴチック体の音節が同じ強さを持っているのではなく、詩脚内にあるほかの音節よりも強いということである。同じ「弱強」の詩脚でもその強さや弱さは多様である。ただし、語が固有に持っているアクセントのある音節と詩のリズム内でストレスが落ちている部分が同じである場合には聞えがかなりよい。詩は語固有のアクセントを考慮に入れながら、それに詩のリズムをかぶせることにより成り立っている。このような観点からすると、上の詩のなかでもっとも詩的な響きを持つ語は magnificently と littleness である。

5 X の発音

アクセントの位置によって同じ文字でも読み方が異なることがある。ここでは X の発音を見てみよう。[éks] と読む場合は X-ray のように X が単独で現れるときである。X が Xavier, xylophone, xanadu のように語頭にあるときには [z] と読む。Six, sex, relax, Alex のように語末にきたときには [ks] となる。Exist, exact, examine, Alexander のように X の右側にアクセントがあり、左側に母音が

あるときには [gz] となる。Mexico, Texas のように X の左側にアクセントがある場合、および Oxford, excellent, experience, expect, Vauxhall のように X の右側に子音がある場合には、[ks] となる。X にはもう一組の発音があるがこれもアクセントの位置によって決まる。Anxious は X の右側にアクセントがないので、[ks] となるはずであるが、その場合には [æŋksɪəs] となる。しかし、[si] は同化して [ʃ] に変わる。したがって、[æŋkfəs] となるが、[k] が弱化して発音されないことがある。その場合には [æŋfəs] となる。一方、anxiety は X の右側にアクセントがあるので、X は [gz] となる。n と g が同化して、[æŋzaɪəti] となる。これが X のアクセントと発音に関する基本原理であるが、すべてがこの原理で説明できるわけではない。その 1 つが luxury である。アクセントは lux の音節にあるので、X は [ks] となるはずである。すると、[lʌksər] となる。[ks] が [kf] に変わり、[lʌkfəri] となる。これだけなら問題ないが、アクセントの位置からすれば、本来、[ks] となるべきものが [gz] になる読みもある。[lʌgzəi] から [z] が [ʒ] に変化して、[lʌgzəri] になる。アクセントと発音の原則を基本的には満たしているが、基本から外れる読みも同時に存在している。Exile にも同様の現象が見られて、[éksail] という原則に従った読みと、[égzail] の読みが存在する。以上、述べたようにアクセントの位置が発音に影響を与えることがある。もし、exist を exist のようにアクセントの位置を間違えて読むとするなら、発音は [iksist] と読むことになるだろう。

6 Iron curtain

i-ron cur-tain のアクセントは (1) i-ron cur-tain, (2) i-ron **cur**-tain, (3) i-ron **cur**-tain の 3 つの可能性がある。アクセントのある音節は聞え (sonority) がよく、必然的に重要な意味情報を含む。意味のないところにアクセントを置くことはない。日本語で表わすと、(1) は「鉄カーテン」、(2) は「鉄カーテン」、(3) 「鉄カーテン」となる。これは正確な表記ではないが、意味の違いが類推できる。(1) は「鉄」が問題になっている。金、銀、銅、鉄などの金属のカーテンがあり、そのなかの鉄のカーテンである。カーテンはすでに了解済みの情報であり、それが金なのか鉄なのかなどが問題になっている状況が考えられる。(2) はカーテンだということに関心があり、素材が「鉄」だということである。A long curtain は「長いカーテン」であるが、long はカーテンの 1 つの属性を述べている。この考えに従えば、iron curtain の iron は long と同じで、1 つの形容詞のように機能している（この場合は複合語に分類されが、このことについては後に触れる）。(3) はどちらにもアクセントがある。鉄だけを問題にしているので

もなければ、カーテンだけを問題にしているわけではない。鉄とカーテンが独自性を保持したまま両者が結合して、鉄でもカーテンでもない第3の意味を成す。2語からなる複合語の場合には前の語に第1アクセントがある場合、後の語に第1アクセントがある場合、およびそれぞれの語にアクセントがある場合が考えられる。最初の2つがより自然な形態である。第1アクセントが2つある(3)は特殊な意味になることが多い。iron curtain は The Iron Curtain と大文字で表記されて、旧ソ連と西側諸国の間にある障壁を指す。複合語の各語に第1アクセントを置くことにより、(1), (2) などと異なる意味であることを表わす。とくに政治問題や社会問題などの「障壁、障害」を stone wall というが、同じ意味なのに **stone wall**, **stone wall**, **stone wall** の3種類のアクセントが認められることもある。アクセントは意味の違いを表わす重要な要素であるが、流動的な面も残している。アクセントの位置が変わっても、文脈があればどのような意味なのかは類推できる。しかし、stone wall という複合語も、やはり、iron curtain に関して説明したことが基本に当てはまると考えている。

Chairman は **chairman** で第1アクセントのみである。「椅子」の意味が重要である。man に第2アクセントがあってもおかしくないが、今日では複合語の意識が薄れて第1アクセントのみを持つ語として認識されている。Chairwoman, chairperson になると、第2アクセントが現れる。Chairman に比べるとより複合語に感じられるのであろう。Chairman における man は woman に対するものとして使われているのではないが、chairwoman は明らかに man に対抗する意味で使われている。Chairman には男女の意識が最初にはなかったが、chairwoman が出てきてからは、chairman が「男」の意識を持つようになった。Woman や person に man と対抗する意味を持たせようとするなら、第2アクセントを置く必要がある。本来、chairman の man には第2アクセントがなかったが、chairwoman が出てきたことにより man に第2アクセントを置かなければならない状況もあるものと思われる。

Woman killer はアクセントによってどのように意味が変わるのだろうか。Woman **killer** のように複合語のアクセントが kill にあれば、「殺し屋」である。Woman は killer を修飾する形容詞として理解できるので、「殺し屋」の性別は女性である。つまり、female killer のことである。**Woman killer** は「殺し屋」であるが、とくに「女性」にアクセントがあるので殺す対象が女性であると理解できる。Woman が形容詞的に機能している例では killer は女性に限られるが、そうでないアクセントのときには killer の性別は男女のどちらもありえる。**woman killer** のようにそれぞれに第1アクセントがある場合の意味は、Woman

Killer と大文字で表わしたくなるような何かではないかと思う。女性のバーテンダーがカクテルをつくっている。このカクテルは美味なるもので女性が飲むと、皆、おかしくなる。このカクテルに The Woman Killer という名前をつけるとする。その場合には両方に第1アクセントを置くのがよいと思われる。

7 第1アクセント、第2アクセント

英語のすべての語はアクセントを持つ。つまり、アクセントを持たぬ語は存在しないということである。それほどにアクセントは英語にとって重要なのである。語からアクセントを削除するか、ほかの位置にアクセントを移すか、アクセントの数を意図的に増やしたり減らしたりすると、語としての存在が脅かされる。

なぜ、アクセントが必要なのか。それは語にリズムを与えるためである。英語を使うときにはすべての語が英語のリズムに乗っていないといけない。リズムなしに英語を使うことは不可能なのである。英語のリズムは「強弱」のリズムになることが多い。「強」や「弱」は音節に与えられるものであるから、音節が1つの場合にはアクセントは1つしかない。音節が2つの場合にはアクセントは最大2つである。2つの音節に同じ強さのアクセントがあるなら、「強強」のリズムになる。しかし、「強強」のリズムは息抜きが許されないリズムであり、緊張が連続する。「強強」のリズムになるのは特殊な場合だけで、通常は「弱」を加えて「強弱」か「弱強」になる。どちらがより英語の基本リズムかと言えば、「強弱」のほうである。LDCE の2音節語をすべて調べてみると99%が「強弱」のリズムであるという報告もある。3音節語の場合には「強弱弱」、「強弱強」、「弱強弱」などの組み合わせが考えられる。ただし、「強強強」や「弱弱弱」のようなリズムは、通常、存在しない。複数の音節があるときに、すべて「強」、あるいはすべて「弱」とした場合にはリズムそのものが存在しないことになる。基本は「強弱」であるから、3音節語の場合も「強弱」になるのがよい。「強弱弱」、「弱強弱」のいずれかになるはずで、「弱弱強」がもっとも起こりにくい。これに関してもLDCEの語に関する調査があり、90%が「強弱弱」になると言う。この結論は正しいと思う。なぜなら、2音節語の「強弱」のリズムが3音節語に反映されないとするなら、2種類の独自のリズムを持つことになり、リズムの衝突が常にかかることになるからである。あるいは衝突を避けるためにリズムの変更を余儀なくされるからである。このようなことが頻繁に起こると、英語のリズムそのものが危うくなり、その結果、言葉としての存在が危機に立たされることになる。3音節以上の語にな

ると、「弱」の数が増えてくる。Familiarity は fa-mil-i-ar-i-ty と 6 音節からなる。6 音節のなかに強を 1 つだけ入れると、良く聞えるところ、すなわち、卓立するところ (prominence) が 1 つになる。すると、あとの 5 つの音節は聞えが悪くなる。聞えが悪くなるということは聞えなくなる可能性があるということである。したがって、この場合にも言葉としての存在が危うくなる。英語の基本リズムである「強弱」から遠ざかる。このような不具合をさけるためにアクセントのある強音を妨げない範囲でもう 1 つの強音を挟んでやる。これを第 2 アクセントと呼ぶ。第 2 アクセントは、通常、第 1 アクセントのすぐ隣にはこない。隣にくると、「強弱」のリズムをつくるという目的が果されないからである。Familiarity を例にとれば、第 1 アクセントは -ar- にあり、その左の音節 -i- を飛び越えて -mil- に第 2 アクセントがくる。第 2 アクセントは第 1 アクセントより強くてはいけない。語の中心は第 1 アクセントにあるのであり、それを脅かしてはならない。

第 2 アクセントは第 1 アクセントより左方向にくる。その理由を考えてみる。第 2 アクセントを必要とする語は音節数の多い語であるが、この種の語のアクセントは後から 3 番目の音節に第 1 アクセントがくる傾向にある。第 1 アクセントより右側には 2 つの音節があるが、通常、第 1 アクセントの右隣に第 2 アクセントがくることはない。第 1 アクセントの両隣は弱音が適してしている。第 1 アクセントより右側の音節で残るのは語末の音節である。語末の音節にアクセントがくることは通常ない。したがって、第 1 アクセントより右側の音節が第 2 アクセントを担うことはない。その結果、第 2 アクセントは第 1 アクセントより左側に来る。ただし、第 1 アクセントの左隣の位置は除かれる。Dictionary は dic-tio-nar-y, dic-tio-nary, dic-tion-ary などに音節区分される。第 1 アクセントは dic- にあるが、このなかで最初の音節区分の場合には -nar- にアクセントがある可能性が高い。このアクセントは第 2 アクセントよりさらに弱い第 3 アクセントである可能性がある。第 2 アクセントは第 1 アクセントより左側方向で、第 1 アクセントの右側方向にあるアクセントは第 3 アクセントと思われる。Dictionary を 3 音節区分する場合には、「強弱弱」のリズムになり、アクセントは第 1 アクセントのみである。第 1 アクセントの右側方向にある第 3 アクセントと思われるものはあったり、なかったりで義務的ではない部分がある。イギリス英語では dictionary に第 1 アクセントのみを認めている。

8 強形と弱形

And は英語の語彙の中で使用頻度が高最も高い語の 1 つである。一音節語

の簡単な語であるが、この語はいろいろな問題を含んでいる。統語上の問題もあるが、音声上の問題もある。

Daniel Jones は、and には強形と弱形があり、強形は [ænd] で、弱形は [ənd, ən, nd, n, m, ŋ] であると述べている。And に限らず多くの語に強形と弱形がある。共通して言えることは、強形はおおむね 1 つであるが、弱形は 1 つに限らないということである。強形には段階性がないが、強い音が弱まっていく過程は一樣ではない。音が弱まっていくと、最後には聞えなくなる。弱形は強形の音の部分的変化と消失を表わす。強形の [æ] のアクセントがとれて弱化して [ənd] になる。Beach and sea, judge and jury では前の音の影響を受けて [d] が消えて [ən] になる。Bacon and eggs の hendiadys では [n] になる。綴り字にも影響を及ぼし、rock 'n' roll のようになるものもある。Deep and efficient, job and her ambition では直前の p, b の影響を受けて [m] となることもあれば、drink and drive, young and vulnerable のように k, g の影響を受けて [ŋ] になることもある。And にアクセントがあるとき、母音を強く読むときは、そのあとの子音もしっかりと発音される。つまり、and の存在を意味的に明示したいときには強形になる。原則的にはすべての and を強形で読むことが可能であるが、and を強形で読まない意味がとれないような場合がある。たとえば、and が文頭に置かれたときや、Save a child's health, and, possibly, life. におけるように and が接続する項が直に並列されていないときである。同種類の 2 つの項が並列されているときには位置的に並列が明らかになるので、and は弱形でよい。and が強形になるとときには and の前後のいずれかに間 (pause) があることが多い。And にアクセントを置くのは and の意味を明確にしなければならない状況があるときである。And が接続する項と項の関係が曖昧になる可能性があるときには and は強形になる。アクセントは意味を明瞭にするためにも使われる。

9 Sudan

Sudan はアフリカ北東部の国であるが、読み方を考えてみる。アクセントが前の音節にあるときには **Su**-dan または **Sud**-an が考えられる。**Su**-dan は u が d を引き寄せていないので重母音で読んで「スーダン」となる。**Sud**-an は u が d を引き寄せているので u を短母音で読んで「サダン」となる。アクセントが後の音節にあるときは「スダン」または「サドアン」が考えられる。英語の 2 音節語のアクセントは前の音節にくるのが、英語の一般的特徴である。であるから、前の音節にアクセントを置いて読むと、英語らしいと感じる。Sudan を「スーダン」、「スダン」と読めば、字面はともかくとして音声的には英語の

臭いがするはずである。怪しげな字面の語であるが、音声的には英語に帰化しているような感覚になるはずである。「スダン」や「サドアン」のように後の音節にアクセントがあると、字面だけでなく音声面においても本来の英語ではないと感ずる。つまり、「スダン」や「サドアン」は「自分たちの言語」ではなく、よその国の言語と感ずるはずである。われわれが日本語を使っているときも、そのなかに日本語らしくない語が入ってくると敏感に反応する。表記するときはカタカナにして外国語であることを喚起する。どこの国の言語も外国語に対しては敏感になる。英国人は外国語であると知らしめるためにわれわれのカタカナを使うわけにはいかない。Sudan はアラビア語の sudan (黒人の国) から、おそらくフランス語を経由して英語に入ったものであろう。Sudan は英語に入っても Sudan であり、表記が変わらない。それでは英国人は Sudan が外来語であることをどのようにかぎわけているのか。字面や音声によってかぎわけけるわけであるが、とくにアクセントによってかぎわけているように思う。もし、彼らの流儀にしたがって、前の音節にアクセントを置いて、「スーダン」や「サダン」と読んで違和感がなければ、完全に英語に帰化したことになる。Tsunami は「ツナミ」ではなく「ツナミ」と後寄りの音節にアクセントがある。これは tsunami が外来語である証である。では tsunami が英語に帰化する可能性があるだろうか。その可能性はほとんどないであろう。もし、帰化するとすれば、「ツューナミ」のように発音されるであろう。Futon は最初の音節にアクセントがあり、音声的に英語に帰化した語である。帰化の代償として音声か「フトン」ではなく、「フュートン」に変わってしまった。われわれが「フュートン」と聞いても「蒲団」を思い浮かべることができない。これが英語に帰化したということなのである。一般的に言えば、futon のように完全に帰化することは少ない。政財界の大物を tycoon という。この語は他の英語の語とかかわらぬ扱いを受けている。ただし、「タイクーン」と読まれるのであり、「タイクーン」とは読んでもらえない。なぜなら、tycoon は「大君」であり、日本語だからである。ブラジルへ移住した日本人がポルトガル語を話し、市民権を得ても、ブラジル人になるのは簡単ではない。二世、三世と子孫の代になってブラジル人となるのであろう。Tsunami や tycoon のような言葉は子孫を増やすことができないから、最初から最後まで一世語で、外来語のままである。

日本語だけがこのような扱いを受けるかといえばそうではない。フランス語でもドイツ語でも同じである。Ballet はフランス語であるが、英語でも同じ綴りである。この語はどのくらい英語に帰化しているのだろうか。英語式に読めば、「バレット」になるはずである。ところが、語末の t はフランス語では読

まないのも、それがそのまま英語でも採用されている。よく言えば、フランス語の読みを踏襲しているからフランス語への敬意が感じられる。わるく言えば、よそ者扱いしていることになる。アクセントを見ると、「バレイ」と「バレイ」の二通りがある。フランス風の読みと英語風の読みの両方が認められている。Debris も ballet とまったく同じ扱いを受けている。

英語に帰化することがよい、わるいの議論ではない。帰化の度合いとアクセントが密接に関係していることを述べたかったのである。

10 Fifteen と eighteen

13 から 19 までの数字には -teen が付加する。-teen は OE の時代からある語で ten の意味である。Fifteen は five+ten で 15 を表わす。Fifteen のアクセントは **fifteen** となるのが普通であるが、**fifteen** となることもある。Seventeen も同じで 2 つのアクセントが認められる。第 1 アクセントは -teen にあり、第 2 アクセントが fif- にある。第 1 アクセントと第 2 アクセントが入れ替わることにより 2 つの形式ができた。代表的な英和辞典である『リーダーズ』と『ジーニアス』でアクセントの位置を確認してみると、今述べた通り -teen に第 1 アクセントがあるとした上で、第 1 アクセントと第 2 アクセントが入れ替わることがあると記載されている。13 から 19 までの数字は、皆、このように扱われているが、**eighteen** だけは **eighteen** のみを認めている。**Eighteen** の記載がないのは単なる偶然ではなく、そこには 2 つの辞典に共通するなんらかの意図があると思われる。しかし、それがなんであるかはわからない。当然、**eighteen** にも第 1 アクセントの異なる 2 つの発音が認められるべきである。現に Daniel Jones の発音辞典では 2 つの発音形式を認めている。**Eighteen** となるときには注釈があり、‘according to sentence-stress’ と述べている。これはどういうことかということ、通常は **eighteen** と発音するが、文中に出てくると前後の関係から **eighteen** と発音することがあるということである。具体的に述べると、He is **eighteen**. と **Eighteen boys** came. では第 1 アクセントの位置が異なる。あとの文では boys に文強勢 (sentence-stress) があるので、-teen に第 1 アクセントを置くと、**Eighteen boys** となる。つまり、「強強 (spondee)」が生じる。Spondee は一般的なリズムではないので、出きる限り避けなければならない。「強強」を回避するためには第 1 アクセントを移動して **eighteen boys** としなければならない。Jones が言う ‘according to sentence-stress’ はこのようなことを述べたものであろう。W. H. Davies の ‘Sheep’ という詩のなかの 1 行を見てみよう。羊運搬船で羊をボルチモアからグラスゴーへ運ぶのであるが、一緒に船に乗ってく

れる人を捜している場面である。羊運搬船の人が若者に声をかけて、「いいか、俺には羊が 1,800 頭いるんだがな」と言った。

Come, I have eighteen hundred sheep,

これを韻律分析すると弱強 5 歩格になる。

Come, I | have **eigh** | teen **hun** | dred **sheep** |

Eighteen と読めば分析が可能であるが、**eighteen** ではどうにもならない。文脈強勢は語が単独で持つアクセントより上位にあるから、最終的なアクセント（強勢）は文のレベルから見ないと判断できない。Gradually は辞書の定義では **gradually** であり、第 1 アクセントのみである。しかし、文のレベルになるともう 1 つアクセントが出てくる。Emily Dickinson のある詩の 1 行を見てみよう。

The Truth must dazzle gradually

これを韻律分析すると弱強 4 歩格になる。

The **Truth** | must **daz** | zle **grad** | ually |

Gradually は 2 箇所ストレスがある。Grad- には本来のアクセントがあり、-ly は文脈によるアクセントである。Fifteen や eighteen の第 1 アクセントと第 2 アクセント（正確に言えば、第 3 アクセントかもしれない）が入れ替わるのはそのあとに続く語（多くの場合、名詞であるが）の最初の音節に強勢がある場合であると、定義できる。このようにアクセントは絶対的に固定されるのではなく、第 1 アクセントが格下げされて第 2 アクセントになったり、第 2 アクセントが第 1 アクセントに格上げされたり、あるいはまた、本来、アクセントを持たない語にアクセントが発生したりすることがある。これは言語をより柔軟に使用するために欠かすことの出来ない工夫の 1 つであると言える。もう 1 つの例をあげておく。

Waterloo は固有名詞で地名を表わす。音節は Wa-ter-loo で 3 音節である。Wat-er-loo ではないので、a は短母音ではなく長母音である。アクセントの位

置は3箇所 of the いくつかになる。外来語であることを考えると Waterloo になる可能性がもっとも高いであろう。Wa- に第2アクセントを置くことも可能である。辞書の定義をみると、アクセントに関しては2つ示している。いずれも第2アクセントを認めている。1つは Wa- に第1アクセントを置き、-loo に第2アクセントを置くものである。残る1つは逆のケースである。本来、語のアクセントはその語をほかの語と区別するためのものであるから、2つのアクセントの形式を持つのは不自然である。Waterloo のアクセントは外来語であることと響きを考えるとときに -loo に第1アクセントがあり、Wa- に第2アクセントとするのが自然であろう。ところが、Waterloo Station, Waterloo restaurants では -loo が第2アクセントに格下げされて、Wa- が第1アクセントに格上げされる。その理由は -loo の直後に第1アクセントを持つ sta-, res- があるからである。「強強」の連続を避けるために第1アクセントを Wa- に移動したのである。もし、Waterloo to Paris flights, Waterloo hotels であれば、第1アクセントの移動は起こらないと思われる。このように語が固有に持つアクセントと前後の語の影響によるアクセントがあり、多くは語固有のアクセントを維持するが、アクセントの移動を余儀なくされることもある。

11 Father と mother

Thomas Hood の 'The Bridge of Sighs' という詩の第8スタンザは次のように始まる。

Who was her father?

Who was her mother?

Had she a sister?

Had she a brother?

この詩は dactyl、つまり、強弱弱調で知られるが、この部分を韻律分析すると次のようになる。(アンダーバーは catalexis を示す。)

| **Who** was her | **father**? _ |

| **Who** was her | **mother**? _ |

| **Had** she a | **sister**? _ |

| **Had** she a | **brother**? _ |

Father, mother, brother は字面が似ている。アクセントも最初の音節にある。そのために、音節区分をするときに、fath-er, moth-er, broth-er または fa-ther, mo-ther, bro-ther のどちらかに統一されるように考えがちであるが、mother と brother は同じ位置で音節区分されるが、father は fa-ther となる。両者を分けるのはアクセントと母音の長さである。Mother, brother はアクセントのある母音が短母音である。これに対して father はアクセントのある母音が長母音である。長母音の場合には後続の子音を引き寄せなくとも、音声上、独立性を保てる。一方、短母音の場合には後続の子音を引き寄せる。子音を c、母音を v、長母音を vv、音節の境界線を -、アクセントのあるところをゴチック体で表記すると、father は [cvv-cvc] となり、mother, brother は [cvc-vc] となる。この規則はアクセントと音節区分に関する規則としてはもっとも重要なものである。Japan の場合を考えてみよう。2つの母音が子音を挟んで存在するので、Japan は2音節語である。音節区分の可能性は Ja-pan か Jap-an の2つである。Ja-pan とした場合、最初の母音が p を引き寄せていないので長母音であることになる。したがって、読み方は「ジャーパン」か「ジェイパン」になる。第2音節にアクセントがある場合には「ジャパン」となる。最初の音節にはアクセントがないので、p を引き寄せない。最初の音節の母音が短母音であれば、p を引き寄せるので Jap-an 「ジャプアン」となる。Japan の読み方の可能性を考えると、最低4つが考えられる。もちろん、現在、採用されている読みは「ジャパン」である。次に Japanese についてみてみよう。最後の e は黙字であり、これを除くと母音が3つ残るので、最大で3音節に区分される。最初の a がアクセントのある短母音であれば、p を引き寄せるので Jap-anese となる。-anese の a はアクセントがないので次の n を引き寄せない。この a にアクセントがあると、その前の Jap に続いてアクセントのある音節が連続することになる。つまり、「強強」のリズムになる。基本的には英語では「強強」のリズムは排除される。その結果、-a-nese と区分される。Japanese で注意すべきことは p を引き寄せて Jap と音節区分したのであるが、それは a にアクセントがあるからであった。アクセントがあればよいのであって、必ずしも第1アクセントである必要はない。Ja- の a にアクセントがないとするなら、p を引き寄せないので Japanese となる。Panese の a を短母音で読み、アクセントがあるとするなら n を引き寄せるので pan-ese となる。a にアクセントがなければ、pa-nese となる。Japanese の正しいアクセントと発音について知っていることは大事なことであるが、アクセントの位置を変えることによってどのような読みの可能性が生じてくるかを考えてみることも重要である。

第2アクセントが子音を引き寄せる話をしたので、もう1つ dictionary について考えてみる。Dictionary の母音をゴシック体で表記すると **d i c t i o n a r y** となる。y は母音字に入らないが、音声的には母音になる。したがって、dictionary には5つの母音が含まれている。第1アクセントが i に、第2アクセントが a にあるとする。アクセントのある母音は次の子音を引き寄せるので、dic-tionar-y がまず得られる。最初と最後の音節には母音が1つしか含まれないので、これが最終的な音節区分になる。次に -tionar- を見ると母音字が3つも含まれている。最大で3つの音節に区分される可能性がある。ti は [ʃ] と発音するので i を母音として考えなくてもよい。この段階で2音節に区分されることがわかる。次にくる問題は n をどちらの音節に入れるかである。子音は直前にアクセントのある短母音が来るときには短母音に引かれる。すでに述べたこの原理に合わせると、n の直前の o にはアクセントがないので n は前に引かれない。後の音節に属することになる。その結果、-tio-nar- と2音節になる。アクセントと母音の観点から dictionary を音節区分すると、第1段階で dic-tionar-y が得られて、次に -tio-nar- が得られる。Dictionary の最終的な音節区分は dic-tio-nar-y となる。この分析からもわかる通り、アクセントを考えなければ音節区分ができない。かりに dictionary のどこにもアクセントがないとすれば、音声上の集合がないことになる。集合を失うと「辞書」という意味を失い、残るは d-i-c-t-i-o-n-a-r-y という記号の連続になる。英語という言葉の根幹から潰そうと思うなら、すべての語からアクセントを外せばよい。

12 ゲルマン系とロマンス系

英語語彙の起源は2種類に大別される。1つは北から来たゲルマン系の語で、もう1つは南から来たロマンス系の語である。ゲルマン系とロマンス系の間には様々な違いがある。よく知られていることであるが、ゲルマン系は短い語で、日常的に使われる語が多い。ロマンス系は逆に長くて、非日常的な語が多い。ゲルマン系の語は1音節語と2音節語が大半を占める。アクセントは1音節語の場合には1箇所のみであり、2音節語は前か後のどちらかである。ゲルマン系の語は、一般的に、前寄りにアクセントがある。Window はゲルマン系の語であるが、**w**indow であって window ではない。これに対して、ロマンス系の fenetre は fenetre であって fenetre ではない。ロマンス系の言語は長い語が多いと述べたが、長くなる理由は語幹に接頭辞や接尾辞を追加できる仕組みになっているからである。ロマンス系の語は言うなれば組立て式になっていて、追加や削除が行ないやすい。たとえば、fenetre からは fenestrade, fenestration,

defenestrate, defenestration などの英語の語ができた。ゲルマン系の window は windowed, windowing, windowless くらいの派生語しか思い浮かばない。ゲルマン系の語は単体で存在していて、組立て式になっていない。ロマンス系の語は語幹があって、それに接辞が付加して長くなる。アクセントはすでに述べたように後寄りになるが、接尾辞は語幹からもっとも遠い位置にあるのでアクセントがつかない。ロマンス系の語の末尾が接尾辞であるとするなら、アクセントは後から2番目、または3番目の音節にくる場合がもっとも多い。Familiarity (fa-mil-i-ar-i-ty) では -ity は名詞化するための語尾であるから語幹から遠い位置にあり、したがって、意味内容に乏しい。そのために、アクセントがこない。音節でいえば、最後から3番目の音節にアクセントがある。ロマンス系の語は長くなりがちであり、それは接辞によるものであった。接辞のうちでも接尾辞が関与する場合が多い。語幹から遠い接尾辞を除いた音節にアクセントがくる。したがって、ロマンス系の語は語末から遡るようにしてアクセントの位置を決めるのが手取り早い。これに対して、ゲルマン系の語は語末の接辞にそれほど気を使う必要がないので、語頭からアクセントの位置を決めていけばよい。ドイツ語とフランス語を聞き比べるとすぐに2つの言語が異なることに気づく。もちろん、文法、語彙、発音など異なるものばかりであるが、もっとも大きな違いは語のアクセント、文のアクセント（イントネーション）の違いである。アクセントやイントネーションを動かせば、ドイツ語をフランス語風に、フランス語をドイツ語風にすることができる。アクセントやイントネーションを一括してリズムと呼ぶとするなら、言語の違いはリズムの違いなのである。リズムの根底にあるのがアクセントである。アクセントのあるところを強く読み、アクセントのないところは弱く読む。したがって、リズムは強と弱から構成される。ゲルマン系の言語とロマンス系の言語の違いはほかの言語の場合と同じようにアクセントの違いであると考えることができる。

13 イギリス英語とアメリカ英語

イギリス英語とアメリカ英語の違いがよく話題にのぼる。綴り字の違い (centre / center)、異なる語を使う場合 (underground / subway)、発音が異なる場合 (schedule) など様々な場合がある。最初の2つは英米の違いを論ずるときにそれほど問題にならない。なぜなら、この違いはあまりにも明白な事実であって、議論の余地がない。ところが schedule は全く同じ語でありながら、発音が異なる。イギリス英語とアメリカ英語の違いを論ずるなら、このような音声上の違いを論ずるほうが価値がある。なかでももっとも重要なのはアクセントの

違いであろう。度々、使っている「アクセント」は ‘accent’ のことであるが、accent は強く読むところ、つまり「強勢」の意味で使っている。accent にはもう1つの意味がある。それは「なまり」とか「方言」の意味である。Accent のもとの意味は「調子」のことであるが、同じ語でも調子が異なることがある。東京弁と関西弁を比べてみるとすぐにわかる。英語でもそのような現象がある。綴り字や発音が明らかにイギリス英語とアメリカ英語で異なるような場合ではなく、同じ語でありながらアクセントのみ異なることがある。同じ語が異なる「調子」で使われることがある。Adult はイギリス英語では adult と前の音節にアクセントがくる傾向にあるが、アメリカ英語では adult と後にアクセントがくる。magazine はイギリス英語では magazine と最後の音節にアクセントがあるが、アメリカ英語では magazine と最初の音節にアクセントがくる。すべての場合に例外なく英米のアクセントの違いが守られるわけではないが、このような傾向があることも事実なのである。すでに述べたことであるが、dictionary はイギリス英語もアメリカ英語も dictionary と最初の音節に第1アクセントがある。しかし、アメリカ英語では -nar- のところに第2アクセントと思われるものをを入れるが、イギリス英語は第1アクセントのみで第2アクセントがない。イギリス英語とアメリカ英語の違いは綴り字や発音そのものなど様々な違いがあるが、アクセントの違いはリズム(調子)の違いであり、もっとも重要視されるべきものである。

14 複合語のアクセント

6で述べたことと重複するところがあるが、複合語について簡単に触れておく。2語を合成して1つの意味を持たせることがあり、これを合成語または複合語と呼んでいる。Woman doctor には「婦人科医」と「女医」の2つの意味がある。「婦人科医」は woman doctor で最初の名詞に第1アクセントがある。「女医」は逆に woman doctor とあとの名詞に第1アクセントがある。アクセントが置かれる位置は個々の語のアクセントの位置で、複合語になったからと言って、ほかの位置にアクセントが移動することはない。複合語になってもそれぞれの語がそれぞれのアクセントを保持するということである。問題は2語のうちで、どちらの語に第1アクセントがくるかである。[woman doctor] を1つの名詞(複合名詞)と考えてみる。1語名詞は前寄りにアクセントがあるので、複合名詞においても前寄りの名詞(woman)にアクセントがある。そして、第2アクセント、または第3アクセントが後寄りの名詞(doctor)にくる。「婦人科医」の woman doctor において doctor はあまり重要な要素ではなく、何

を専門とするかが問題になると woman が重要な意味を持つ。医者を中心外科医、眼科医、産科医などのように分類した場合に女性を診察対象とする医者が **woman doctor** である。Woman は医者や診察部位によって類別する (classify) 役割を果たしている。Woman と doctor が合わさって 1 つの意味になるとときには類別を示す woman に第 1 アクセントがくる。これに対して、「女医」は woman が 1 つの形容詞のように働いている。A famous doctor の famous と同じ役割を woman が果たしている。Famous や woman は doctor の内的属性を述べている。woman は「男ではなく女の」の意味である。このようなときには doctor に第 1 アクセントがあり、通常の結合形態になる。したがって、複合語にはならない。woman doctor が複合語になるのは「婦人科医」の場合だけであり、「女医」は複合語ではない。複合語は 2 語が合わさって、新たな意味概念を持つ必要がある。

よく問題にされる English teacher を見てみよう。これには「英語教師」と「英国人 (の) 教師」の 2 つの意味がある。複合語になるのは「英語教師」(英語を教える教師) のほうで、English (前寄りの名詞) のほうに第 1 アクセントがくる。教師にもいろいろいるが、フランス語やドイツ語ではなく、英語の教師ということで、English は教師の類別を示している。一方、「英国人の教師」は a person who is English ということで、English は person の属性を示す。Teacher を [teach+person] と表記したときに English が結合するのは teachではなく person のほうである。したがって、「英国人の教師」は an English person who teaches…となり、どのような科目を教える教師であるかは不明である。

よく知られた例をもう 1 つあげる。Blackboard は複合語で、black に第 1 アクセントがあり、意味は「黒板」である。Black board は「黒い色の板」であり、board に第 1 アクセントがある。Black は形容詞であり、したがって、deep black board ということができる。黒板の場合には the very blackboard のように言えない。複合語である blackboard (名詞) に very が付加しているとは考えられない。あえて、訳すなら、「まさにその黒板 (です)」くらいになり、very は段階性を示す副詞ではない。

15 おわりに

意味のわからない英語に出会うと辞書を引く。そして、意味を確認する。すこし丁寧に辞書を読む人は発音記号や文法的な記述を見るかもしれない。ところが、アクセントの位置に関して注意を向ける人は少ないように思う。どこにアクセントがあろうが、意味さえ分かれば英語を読むことができるから、アク

セントへの注意がおろそかになるのも仕方のないことかもしれない。しかし、アクセントは語をリズムに乗せる働きをしているので、アクセントを無視するとリズムに乗ることができない。語の意味がわかっても、その語がどのようなリズムなのかがわからないと、語のほんとうの感じはつかめない。語の雰囲気を感じづつつかむことができない。味付けされていない煮物のような感じになってしまう。

本稿では英語のアクセントがどのような問題に関与しているのかについて述べた。主な点を列挙して、「まとめ」としたい。

- ・名詞、形容詞は前寄りに、動詞は後よりにアクセントがある。
- ・アクセントの位置は英語全体のリズムと無関係ではない。
- ・「強強」のリズムはできる限り避ける。
- ・アクセントの位置は品詞のみならず、意味の影響も受ける。
- ・語には語固有のアクセントがある。
- ・詩においては語固有のアクセントと異なるアクセントを持つことがある。
- ・アルファベットの X の発音を決定するときアクセントが重要な要素になる。
- ・複合語はアクセントの位置により意味が異なる。
- ・複合語のアクセントは、通常、最初の語にくる。
- ・アクセントには第 1、第 2、(第 3) がある。
- ・第 2 アクセントは第 1 アクセントの左方向にある。
- ・第 1 アクセントより右方向にあるアクセントは第 3 アクセントの可能性が
ある。
- ・第 2、第 3 アクセントが必要な理由は英語のリズムをつくるためである。
- ・1 音節語でアクセントがある場合には強形であり、ない場合が弱形である。
- ・And の強形は接続関係を明瞭にするときに使われる。
- ・英語に入った外来語の帰化率はアクセントで判断する。
- ・Futon は音声的には英語に帰化しているが、tycoon は帰化していない。
- ・第 1 アクセントと第 2 アクセントが入れ替わることがある。
- ・アクセントのない音節にアクセントが生ずることがある。
- ・文アクセント (ストレス) は語内アクセントより上位にある。
- ・音節区分はアクセントに基づいて行なわれる。
- ・father の音節区分は fa-ther で、mother は moth-er となる。
- ・アクセントのある短母音は直後の子音を引き寄せる。
- ・音節区分は段階的に行なう。

- ゲルマン系の語のアクセントは前寄りに、ロマンス系の語では後寄りになる。
- アクセントがつくるリズムはもっとも重要な言語的特徴の一つである。
- ドイツ語のリズムをフランス語に載せると、フランス語がドイツ語化する。
- イギリス英語とアメリカ英語におけるアクセントの違いは重要である。
- English teacher には複合語の解釈とそうでない解釈の2つがある。